

# 令和 7 年度 学校評価シート

学校名：りら創造芸術高等学校 校長名：山上 範子

## 目指す学校像・育てたい生徒像（スクール・ポリシー等に基づいて記載する）

- ・単なる技術の習得にとどまらず、社会を創造的に生き抜く「新時代のアーティスト」を育む
- ・芸術を通じた創造と対話のプロセスを通じて、自己を磨き、他者を尊重しながら、仲間と共に未知の課題を乗り越え形にする力を持った生徒

## 学校評価の公表方法

- ・学校のホームページで公開
- ・法人役員会等で公表

現状・進捗度	A	十分に達成している。（80%以上）
	B	概ね達成している。（60%以上）
	C	あまり十分でない。（40%以上）
	D	不十分である。（40%未満）

## 自己評価（分析、計画、取組、評価）

番号	計画・取組				評価（2月1現在）		
	重点目標	現状	具体的取組	評価項目と評価指標	進捗度	進捗状況	今後の改善方策
1	夢の実現に向けた「やり抜く力」と自己研鑽の態度の育成を目指す		第一線で活躍するプロの講師による専門指導を通じ、高い志と技術習得への向上心を養う。	専門科目における生徒の出席率および意欲的な受講態度	B	技能に合わせた技術の修得段階を作る必要性がある。	様々な技能段階にある生徒たちを一様にプロの専門指導に任せた時に、発表の機会を分けて技能ごとに分けることや、それぞれの技能段階を客観的に確認しながら、相互的に助け合える授業を目指す。
			公演や地域イベントなど学外での発表機会を設け、本番に向けて困難を乗り越え最後までやり遂げる経験を積ませる。	学外発表（定期公演等）の完遂率および生徒の参加率	A	月に1度以上の定期的な学校行事や舞台表現について行った。	
			舞台制作のリハーサルやミーティングにおいて、相互評価を取り入れ、自身の課題を客観的に把握し改善する姿勢を促す。	ミーティングやリハーサルにおける、「評価シート」を通しての自己・他者評価の記述の具体性	A	定期的な生徒間の話し合いを取り入れ、互いにアドバイスを送ることで相互の技術が伸びた。	
2	多様な価値観を尊重し、共創する人間関係形成力の向上を図る		ミーティング等を通じた学校ルールの策定・議論を行い、対話によって合意を形成する力を養う。	ミーティングへの出席率および発言・提案の活発さ	A	行事等を協力的に進める必要性があることで、それぞれの対話が生まれた。	多様な価値観を持った学外や海外の人々と出会う機会をさらに増やすだけでなく、互いの意見や考えを話すこと、受け入れることの大切さを、舞台というテーマから機会作りをさらに行っていく。
			異文化理解を深める国際交流プログラムを実施し、多様な背景を持つ人々と共生・協力する態度を育む。	国際交流イベント後の振り返りにおける、異文化への関心や気づきの記述内容	A	韓国の高校と交流を行い、また海外研修も行い、芸術表現の可能性を理解した。	
			舞台制作における役割分担（演者・裏方等）を通じ、互いの専門性や貢献を認め合い、組織として協力する姿勢を促す。	プロジェクト完遂後の相互評価における「仲間の役割や努力を認められた」とする生徒の割合	B	プロのアドバイスをもらいながら、実際の舞台発表や展示を実践的に学んだ。	
3	自ら課題を見つけ、創造的に解決する探究心の伸長を目指す		ポートフォリオを活用し、日々の学びや気づきを蓄積することで、自らの成長と次の課題を客観的に捉える習慣を身に付けさせる。	ポートフォリオの継続的な記録率および振り返りの記述内容の深化付けさせる。	B	計画を振り返ることに特化した手帳を導入し、毎朝の確認を行った。	計画の共有や修正におけるネット利用なども検討していく。様々な各生徒のニーズに合わせた授業の多様な提供や、よりレベルの高い選抜クラスの策定を模索しているが、現在は希望者参加としている。また、プロデュースに関しては担当者の生徒と教員が協力しながら、プロの講師と連携して今後も進めていく必要がある。
			補習やスキルアップコースを実施し、生徒個々の習得状況に応じたフォローアップを行うことで、知識・技能の定着を図る。	スキルアップコース等の参加数および受講後の検定合格や実技向上度	B	補習や技術向上を目標とする特別クラスを多数実施し、技術特化が見られた。	
			イベント・舞台等の発表機会と、専門家による特別授業を連動させ、課題を創造的に解決して形にする実践力を養う。	特別授業での学びを反映させた、作品やパフォーマンスの質的变化（外部評価）	B	舞台発表やそれぞれの授業の発表を関連させた、イベントそのもののプロデュースを模索した。	

## 学校関係者評価（2月3日実施）

芸術表現を軸にした取組として、プロフェッショナルによる指導を受けることを行っていることは、目標に適っている。一方、技能段階によって習熟にばらつきができることも課題となっており、習熟段階に合わせたグループ分けや、発表の分けなどの機会を、今後考える必要がある。今年度も実験的に発表対象者を分けた取り組みを行っているため、これらの結果を踏まえながら、来年度以降の行事の組み立てを検討することが望まれる。

また、多様な価値観の共有として、ミーティングなどの機会を多くとることは学校活動の中心としているが、今年度は特に韓国の高校との交流を厚く行ったことで、異文化への理解や興味の広がりを持つことができているように思う。これらを一過性とすることなく、また他の行事等への負担にならない形で今後も継続できることを模索していく必要がある。

さらに、手帳（フォーサイト）における計画と振り返りの指導についてはこれまでも行ってきたことではあるが、スマートフォンなどに比重が大きくなっている昨今の高校生にとって、手書き手帳がなかなか馴染みにくい部分がある。手帳記入の必然性や確認の機会の確保だけでなく、ネット等の様々な媒体にも目を向けて、より効率的で今後も継続的に生徒が習慣としていけるような取り組みが求められる。

全体を通して、学校の重要とする項目の取組については概ね良い結果となっている。しかし、この結果に満足することなく、変化する社会情勢や技術進歩を踏まえ、常に新しい取り組みや技術について目を向け、取組みの方法については更新し続けていくことが肝要である。

来年度以降、より生徒それぞれのニーズに目を向けた多様な授業や体験を提供する機会を増やすことを目指すとともに、従来の生徒それぞれの表現や発表の機会も確保し、また認められていく成功体験を、それぞれの技術段階で得られることを、カリキュラムとして検討していくことが大事となる。